

市長 慰霊のことば

終戦の日を迎え、今年もここ探勝園において、ご遺族をはじめ、多くの皆様ご参列のもと、第二次世界大戦戦亡者慰霊祭を執り行うにあたり、戦亡者の御霊に謹んで哀悼の誠を捧げます。

世界中で数千万人にも及ぶ尊い人命が失われた第二次世界大戦の終戦から、74年の歳月が過ぎ、時代は、激動の「昭和」から、戦争を起こすことのなかった「平成」を経て、人々が美しく心を寄せ合う「令和」へと移りました。先の大戦においては、将来ある若者が、最愛の家族の幸せ、祖国の安寧を願いながら犠牲となり、また、各地における激しい空襲、そして、広島、長崎での原子爆弾の投下により、多くの尊い命が奪われ、国土は壊滅的な被害を受け、まさに焦土と化しました。

私どもの郷土、鹿児島市も、大小8回にわたる空襲を受け、市街地のおよそ9割が焼失し、多くの市民の皆様がお亡くなりになるという、筆舌につくしがたい体験をいたしました。想像を絶する状況の中、かけがえのない家族や友人を失った深い悲しみに耐え、幾多の苦難を乗り越えてこられたご遺族と関係の方々に、改めて、深く敬意を表する次第であります。

戦後、わが国は、一貫して平和国家としての歩みを続け、世界に類を見ない経済発展を成し遂げ、国際社会において重要な役割を担うまでになりました。本市におきましても、ご遺族をはじめ、市民の皆様方の弛まぬご努力により、見事に復興を遂げ、今では、59万人が健やかに暮らし、多くの来街者でにぎわう、南の交流拠点都市として、着実な発展を続けており、本年、市制施行130周年という大きな節目を迎えたところでございます。一方、国際社会に目を向けますと、今なお、国家間や地域間の対立が繰り返され、大量破壊兵器の拡散やテロの脅威などに直面しており、世界の恒久平和を実現することの困難さを痛感いたします。

本年は、戦国武将、島津義弘公の没後400年にあたります。数々の武勇で知られる義弘公は、朝鮮出兵において犠牲となった全ての兵士を、わけ隔てなく弔うため、高野山に供養碑を建立し、これが、我が国の赤十字精神の見本になったと言われております。そして、その供養碑にならって建立されたのが、ここにある「敵味方戦亡者慰霊碑」でございます。私たちは、改めて、この慰霊碑に込められた、敵味方の区別なく、全ての方々を慰霊するという崇高な精神を見習い、大切にすべきであると思えます。

本市におきましては、平成2年に、再び戦争による惨禍を繰り返さないことを誓い、核兵器の全面廃絶等を希求する「平和都市宣言」を行い、その一環として、毎年、「鹿児島市の戦災と復興資料・写真展」や「原爆パネル展」を開催しているほか、市内の小学生・中学生から平和に関する標語を募集し、多くの市民の皆様は平和のメッセージを発信しております。

戦後70年以上が経過し、我が国は、私自身も含め、戦後生まれの世代が人口の8割を超え、戦争の記憶が風化していくことが強く懸念されております。私たちは、戦争という悲惨な歴史の教訓を深く胸に刻み、平和の尊さと、この慰霊碑に込められた思いを、しっかりと次の世代へ語り継いでいくとともに、世界の恒久平和の達成を願い、不断の努力を続けてまいりますことを、ここに固くお誓い申し上げます。

結びに、戦亡者の御霊のご冥福と、ご遺族の皆様方のご健勝とご多幸、鹿児島市の限りない発展を祈念いたしまして、慰霊のことばといたします。

議長 慰霊のことば

本日ここに、ご遺族並びに関係の皆様多数ご参列のもと、第二次世界大戦戦亡者慰霊祭がおごそかに執り行われるに当たり、鹿児島市議会を代表して、謹んで戦亡者の御霊に慰霊のことばを捧げます。

第二次世界大戦という、あの苛烈を極めた戦いの中で、祖国を思い、愛する家族の安寧を願いながら、戦場で命を落とされた方々、あるいは、国内外において、戦禍の犠牲となられた方々の無念さに思いを馳せるとき、終戦から74年もの歳月が経過した今もなお、その悲しみが尽きることはございません。

また、最愛の家族を失われた深い悲しみを胸に、今日に至るまで幾多の苦難を乗り越えてこられた、ご遺族の皆様的心情をお察し申し上げますとき、万感胸に迫るものがあり、深く哀悼の意を表する次第でございます。

戦後、我が国は、国家の再建にたゆみない努力を傾注し、世界に誇る目覚しい経済発展を遂げるとともに、恒久的な世界の平和と安定に向けて全力を尽くしてまいりました。

わが郷土鹿児島市におきましても、激しい空襲で焦土と化した街から復興を成し遂げ、以来、今日まで着実な発展を続け、本年、市制施行130周年の節目を迎えるに至りましたことは、ご遺族をはじめとする、市民の皆様の懸命なご尽力の賜物であると思う次第でございます。

この平和で豊かな愛すべき郷土を、100年、200年先の時代に確実に引き継いでいくことは、本市の「平和都市宣言」で高らかに謳っている理念でもあり、次世代に向けた、私たち鹿児島市民の共通の願い、使命でございます。

終戦から長い歳月が経過し、あの悲惨な戦争の記憶が薄れつつあると言われております。今日、私たちが享受している平和や豊かさは、戦渦の中で亡くなられた多くの方々の尊い犠牲の上に築かれたものであり、私たちは、そのことを風化させることのないよう、世代を超えて語り継いでいかななくてはなりません。

本日、終戦の日を迎えるにあたり、戦争による悲しい歴史を二度と繰り返さぬよう、私たち一人ひとりが、戦争の悲惨さと平和の尊さを深く心に刻み、郷土鹿児島市の更なる発展を目指して、全力を傾注してまいりますことを堅くお誓い申し上げます。

ここに、尊い命を捧げられました御霊に永久の安らぎと、ご遺族並びにご参列の皆様方のご多幸を心からお祈り申し上げます。鹿児島市議会を代表しての、慰霊のことばといたします。

令和元年8月15日 鹿児島市議会議長 山口 たけし

児童代表 慰霊のことば

「戦争」、国家間で、互いに自国の意思を相手国に強制するために、武力を用いて争うこと。

74年前の今日、8月15日、長く続いた日本の戦争が終わりました。私は戦争を知りません。両親や祖父母も戦後生まれで、同じように戦争のことを知りません。しかし、お盆になると母がきまって話してくれることがあります。それは、戦争に行った曾祖父の話です。母は曾祖父のことを「先生じいちゃん」と呼びます。それは曾祖父が病院の先生をしていたからです。母の話は、私に「戦争」について深く考えさせてくれます。

それは、戦争中に日本の敗戦が近いことを感じた曾祖父が投降を決意し、行動にうつそうとしたということです。戦況が日増しに悪くなり、多くの傷ついた仲間を目の当たりにした曾祖父だったからこそその決断だったのではと私は思いました。しかし、その考えを知った仲間たちから、ひどく攻められたそうです。「生きて虜囚の辱を受けず」。これは、当時の日本軍の戦陣訓です。捕虜になるくらいなら自決せよという教えです。このような教えを強制され日本のために勇敢に戦っている仲間たちからしたら、曾祖父の考えは信じられないものだったにちがいません。一つでも多くの命を守りたいと願った曾祖父。日本のために最後まで戦い抜くと誓った仲間たち。どちらの考えが正しかったのか、私には分かりません。しかし、仲間同士をも憎み合う関係にしてしまう「戦争」そのものが何よりも悪い行為だと怒りを覚えました。

私には大切な家族、そしてたくさんの優しい友達があります。大好きな動物に関わる仕事に就きたいと考えている私の夢をいつも応援してくれる家族、毎日一緒に楽しく勉強したり、笑ったりしてくれる友達。平和な日本で生きている私たちにはたくさんの自由や幸せがあります。しかし、私たちの幸せがあるのは、戦争のあった厳しい時代を懸命に生きてきた方々の尊い苦労や努力があったからです。

戦後74年を迎えた令和元年。今の日本は平和の祭典である東京オリンピックの開催を来年度にひかえ、ますます発展を遂げています。確かに私たちは戦争を知りません。しかし、両親や祖父母等、家系をたどっていくと、私たちは必ず戦争を生き抜いた先祖と繋がります。そのことを心に深く刻み、今生かされている命に感謝し、この尊い平和を人類が続く限り、守り抜いていかなければならないという、強い思いを持ち続けていかなければ、と思います。

最後に、戦争で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りして、慰霊の言葉といたします。

令和元年8月15日 鹿児島市立山下小学校6年 有川 こなつ

生徒代表 慰霊のことば

令和元年第二次世界大戦戦亡者慰霊祭の開催にあたり、慰霊のことばを申し上げます。

今日は8月15日。1945年の終戦から74年の時が流れました。決して忘れてはいけない戦争の記憶が語り継がれ、改めて平和である社会の大切さを感じ、平和を祈念する日です。戦争を経験したことのない世代が増え、生まれたときから平和であることが当たり前で、平和への意識がうすれつつある今。これから先の社会が、世界が平和であり続けるために私たちは、平和への意識をどのように変えていけるのでしょうか。

昭和20年3月18日から、終戦間際の8月6日までのおよそ5ヶ月。この5ヶ月の間、ここ鹿児島市は8回もの空襲にありました。当時鹿児島からは特攻機が飛び、他の地方都市よりも激しい攻撃を受けました。満足いく食糧もなく毎日のように飛ぶ敵の飛行機に怯え、疎開によって親と子は離ればなれにされた、当時の市民の人々にとっては、まさに地獄だったことでしょう。何も悪いことはしていないのに亡くなってしまった方や体や心に深い傷を負った方が大勢いらっしゃると思います。そんな空襲の中でも特にひどかったのは、昭和20年6月17日の鹿児島大空襲です。梅雨の真っ只中の鹿児島市の深夜。空襲警報もなく、突如、爆音が響いたといいます。1時間以上もの間、焼夷弾が投下された鹿児島市はたちまち火の海と化したことでしょう。とてつもなく熱かったでしょう。炎と煙しかない中で肺は焼けるように痛かったです。皮膚は痛みを感じなくなるまで焼けたでしょう。そして、炎がおさまったあとの辺りの光景は信じられないものだったことでしょう、「ここは本当に私の住む鹿児島なのか。」と。鹿児島市が焼け野原となってしまったこの大空襲で3000人を超える方々が亡くなりました。私が生まれてから、幸せに笑顔で暮らしてきたこの鹿児島市が74年前、焼け野原であったとはとても信じられません。

そして、こんなに大きな被害を出した大空襲の約2ヶ月後、今から74年前の8月15日。日本は連合国軍に無条件降伏をし、終戦しました。その翌年には「平和主義」を掲げる日本国憲法が制定され、今でも私たちの命を守ってくれています。この憲法により平成という時代は日本にとって戦争のない、平和な時代となりました。しかし、世界では、民族や宗教、文化などの違いによる紛争やテロが絶えません。私は紛争やテロなどのニュースを耳にする度に胸が痛みます。なぜ、同じ人間なのに理解しあえないのだろうか。地球の生き物の中で感情や考え方を表すことが得意なのは人間だと思います。また、表現したことを深く理解し、自分の中で考え、さらに理解を深めることも人間は得意だと思います。なのになぜ、分かちあおうとしないのでしょうか。私には理解できません。そんな紛争やテロを起こす意味はないと思います。そして世界で紛争やテロが起こることのない状況をこの令和という新たな時代で達成していかなければなりません。

令和の時代を生きていく私たちは「平和は当たり前」という意識を捨て、戦争で起こった悲しいできごとを学び、忘れず伝えていかなければなりません。そして「平和は守ろうとしなければ簡単に崩れてしまう」という意識を持つことが大切です。

世界中の人々が平和に、安心して暮らせる時代が訪れることを願い、戦争の歴史を後世へと語り継ぎ、これからも平和な社会を築いていくことをここに誓い、慰霊のことばといたします。

令和元年8月15日 鹿児島市立長田中学校3年 神田 凜理子